

<p>事例 経営体制の強化</p> <p style="text-align: center;">ガバナンスによる大学運営</p> <p style="text-align: center;">～ 京都造形芸術大学・東北芸術工科大学～</p>	<p style="text-align: center;">本事例の中心人物 理事長</p>
--	---

事例内容

【概要】

京都造形芸術大学と東北芸術工科大学は、日本の首都東京を挟み、「弥生文化の中心である京都」と「縄文文化の源流である東北」を結び、芸術文化による日本の再生に寄与することを経営理念としている。京都造形芸術大学は「京都文藝復興」、東北芸術工科大学は「東北ルネサンス」を標榜する芸術教育研究活動を行い、独自の特色ある運営を行いながら、共通する理念のもとに「日本の芸術立国」を目指している。両大学とも開学以来、建学の精神と経営理念にもとづく運営方針により、経営計画を策定、実行してきた。

【背景】

両大学の理事長は、徳山詳直氏である。「戦争と暴力、地球環境の破壊、貧困と格差等現代文明の抱える大きな過ちを、人類が芸術するところ（芸術を思い、愛し、探求する等）を取り戻すことによって克服したい」とした氏の思いが、異なる遠隔の地にある大学設立の理念となっている。

【取り組み内容】

京都造形芸術大学は、「この大学は現代文明への深い反省と激しい苦悩の中から生まれた」「良心を手腕に運用する新しい人間観、世界観の創造こそ大切ではないだろうか。私たちは、芸術的創造と哲学的思索によって、この課題に応えたい」（「まだ見ぬわかものたちに - 瓜生山学園設立の趣旨 - 」より抜粋）という設立趣旨のもと平成 3 年に開学した。平成 12 年から「京都文藝復興」を掲げ、新学科（歴史遺産学科や映像・舞台芸術学科等）の設置、通信教育の拠点整備（東京サテライトキャンパスの開設）、教育環境整備（京都芸術劇場、芸術文化情報センターの開設）による京都の芸術文化の再活性化などの大

学改革に取組み、平成 17 年からは、学生に支持され続ける大学を標榜し、新 5 ヶ年計画「京都文藝復興から日本の芸術立国をめざして - 新五カ年計画の策定にあたって - 」により、以下の 6 つの改革に取り組んでいる。

芸術を通して社会に貢献する人材の育成という観点からの教育課程の再編（こども芸術学科、映画学科等の新設、一般教育の芸術教養科目への再編、受託共同制作をカリキュラムとして推進するプロジェクトセンターの開設）

通信制大学院の設置と研究領域の拡充
通信教育部の強化による草の根レベルの芸術文化活動の普及

国際芸術研究機構設立による海外に向けた芸術立国思想の発信

こども芸術大学の開設（こどもと母親の学びの場）

東アジア芸術文化研究所（ソウル市）設立（東北芸術工科大学及び韓国の弘益大学と共同設置）による東アジア諸国との芸術を通じた連携

一方、東北芸術工科大学は、「この大学は、芸術的創造と、人類の良心によって科学技術を運用する新しい世界観の確立を目指して、その課題に応えたい。」「わが大学の前に道はなし。あるは、歴史の実験のみ。」（「東北芸術工科大学生い立ちの記」より抜粋）という大学設立の宣言のもと平成 4 年に開学した。平成 12 年には「日本列島を覆う現代文明社会の下には、千数百年の歴史に培われた日本の伝統文化の土壌があり、さらにその基層には、縄文の心が息づいています。この何層にも重なる地層の奥底から、私たちは、未来に生きるための叢智を発掘しなければなりません。」（「二十一世紀に向けて 東北芸術工科大学の誓い」より抜粋）と同大学設立の意義を再確認し、「東北ルネサンス」

を掲げ以下の4つの事業を大きな柱として展開している。

東北文化研究センターの展開による「東北学」の実践

研究成果のフィードバックと地域社会活性化への貢献(地域づくり、生涯学習の場提供等)

東北学:東北を基軸に、さまざまな手法で新しい価値観を創出していく「知」の運動

美術館大学構想(大学とその周辺地域の美術館化)への取り組み

専門教育の環境づくりの推進、芸術文化発信拠点の形成による東北ルネサンスの世界展開

全国高等学校デザイン選手権大会の開催
学生の社会貢献、高大連携

デザイン:社会や暮らしの中の、取り組むべき課題の発見と解決のプロセス
こども芸術教育研究センター及びこども芸術大学の開設(こどもと母親の学びの場)

平成19年1月には、京都造形芸術大学に「芸術立国-平和を希求する大学をめざして-」、東北芸術工科大学に「芸術立国-北の大地から、平和を希求する大学をめざして-」が新たな30年の展望と目標として示されている。

両大学とも理事長が示す運営方針、経営計画を常任理事会の承認を経て、教職員総会において理事長自ら教職員に説明を行っている。教職員は、理事長と直接質疑応答をすることで、経営方針等を理解し、経営計画を協力的に実践している。また、学生との関係では、「なぜ、この地にこの大学をつくったのか」「大学で学ぶとはいかなることか」などについて理事長自ら直接学生と対話している。

成功のポイント

建学の理念がしっかりしていること。(芸術のもつ創造力を重視し、芸術教育の機会を世

代や地域を越えて広げることにより日本の変革に寄与したいという理事長の建学の理念への徹底的なこだわり。)

こども芸術大学、京都の通信教育、東北文化研究センターなど、新しい取り組みを行う際の判断基準はあくまでも理念に合っているかどうかという観点であり、その軸がずれないこと。

大学が立地する地域の芸術文化を基盤とし、そこから日本の芸術文化再生を展望するという視点が、教育活動においても徹底されていること。

その理念に共感し、この実現を支える優秀な教職員の存在と彼らのたゆまぬ努力。

理事長自身が執筆した設立趣旨や中期経営計画に関する冊子を教職員、学生、父兄に配布し、理念を共有する努力を常に行っていること。

今後の課題

両大学の今後の将来・発展のため、建学の理念を長期間にわたって語り、共有し続けていくこと。

東北と京都に共通する理念を、両校の連携による取り組みへとさらに具体化させていくこと。

委員の所感

実質上の創設者である徳山理事長に接し、私立大学を支えるのは建学の理念であることを再認識させられた。「なぜ1990年代はじめに、山形に、芸術工科の大学を作ったのか」。このことが訪問前は不思議でならなかったが、徳山理事長自らに理念を語っていただき、2校を自分の目で見て、その意図が共感できた気がした。大学にとって最も重要なのは、どのような教育をして、どのような人材を育てたいのかという根幹部分であり、これがしっかりしていれば、厳しい環境(少子化、立地や分野の特性など)の中でも個性輝く大学であることが可能なだと感じた。